

化粧行動と多様化する社会

化粧は、清潔感を出すことだけでなく、自身を美しく見せることができるものである。自分になりたい自分を表現するという自己表現の一環でもあり、自己肯定感の高まりにつながる。近年では、「多様性」として、性別や国籍、人種など人間ひとりひとりがもつ個性を尊重し、自分らしく生きていけるような社会づくりが進んでおり、化粧をする男性の増加や、ジェンダーレスメイクの発展もみられる。このように、化粧には、長い歴史があり、時代や社会背景によって役割や意味は変化してきた。

本論文では、時代とともに化粧がどのような変化を遂げているのかを、当時の社会情勢や女性の行動の変化とあわせて分析した。また、現代の多様化している社会における化粧がどのような立ち位置にあり、どのような影響によって今の化粧が確立されているのかを明らかにし、今後の化粧のあり方について考察した。

本論文において、主に研究対象としたのは、長く続いていた日本の伝統的な化粧が、西洋の化粧の流入により大きく変化した 1920 年代から、現代にかけてである。1920 年代から長い間は性別役割分業の意識が強く、女性の立場は低かった。しかし、そのような中でも女性たちは運動に参加するなど、立ち向かい続けていた。化粧においても、1950 年代は意思の強さを感じる太い眉が流行するなど、当時の社会情勢と化粧は関連しているように考えられる。近年は、になりたい自分のあり方を表現するようになり、女性だけでなく、男性も化粧をする人が増加した。これらは、多様化する社会において良い傾向であると考えられる。

本論文を通して、社会情勢と化粧は密接な関係があることが明らかになった。このように、社会の影響を受けながら変化していく化粧であるが、いまだに化粧は女性がするものという固定観念を持つ人がいるのが現状だ。しかし、近年の多様化する社会の影響により、以前よりは減少したと考えられる。多様化が進んでいくことは、社会に大きな影響を与えると考える。今後は、化粧が性別にかかわらずひとりひとりの個性を表現するものとして楽しめることが望ましい。